

福島第一原発事故から3年が経った。政府の掛け声とは裏腹に依然として進まない福島の復興。政府をあてにせず自分たちで汚染地域での生活を再建しよう。放射能汚染下で被曝を低減しながら如何に生きていくのか。汚染とどう向き合っていくのか、全ての人々が問われているのだ。

原発事故の思いは昨日の続き

事故から3年が経過し、福島以外の地域では原発事故は過去になりつつある。福島でも行政が主導して原発事故を過去に追いやろうとしている。何かの間違っている。原発事故の影響はこれからが本番だからだ。汚染地域住民にとっては、事故から3年経っても10年経っても事故への思いは昨日の続きである。それがチェルノブイリの経験だ。チェルノブイリに学ばない日本は、また同じ過ちを繰り返すだろう。忘れることは未来につながらない。放射能と真摯に向き合い、被曝を如何に減らすかを真剣に考えながら未来を作らなければならない。避難者も残った人々にとっても思いは同じはずである。チェルノブイリでの活動と同じく、私たちは汚染地域に残らざるを得ない人々に寄り添って生きる。

内部被曝低減のために

チェルノブイリでは被曝の約70%は内部被曝だった。見えない放射能を私たちは日々体内に取り込んで暮らしている。汚染し難い野菜を作り、汚染を減らす栽培方法を工夫することは可能だ。ウクライナでは放射能を良く吸収する菜種でゆっくり除染しながら、バイオエネルギーで地域の復興を目指した。ナタネの裏作は汚染が激減する、という発見は汚染地域での新たな農業の可能性を開いた。この経験を福島でも活かし、新たな農業の可能性を目指したい。汚染地域で過去と同じ稲作中心の農業だ

けでは成り立たないからだ。

南相馬を新たな農業の前線に

チェルノブイリの経験から、ナタネ種子は強く汚染するが、ナタネ油は汚染しないことが分かっていた。2012年に南相馬で試験栽培したナタネの油でも、ゲルマニウム半導体検出器の精密分析で検出限界0.03Bq/KgでもND(検出せず)だった。土壌の水分から吸い上げられたセシウムは植物体の中でも水溶性で、搾油時に油とは分離するのである。放射能は全て油かすに残る。現在、植物油の国産化率は4%未満、ナタネ油に至っては0.04%である。市販の食用油はカナダ産の遺伝子組換えキャノーラ油である。安全な植物油の国産化を目指すことも福島復興に叶う目標だ。

南相馬農地再生協議会発足

2013年12月、南相馬の農家や市民団体で「南相馬農地再生協議会」が発足した。ナタネを現在12.5ha栽培している。6月末には収穫し、搾油して全国の消費者に届けたい。勿論、農作業での被曝には十分気を付けなければならない。2015年には南相馬に搾油工場を作りたい。2016年には汚染した油粕やバイオマスでメタン発酵させるバイオガス工場を作り、冬季の温室の加温や夏季には発電に利用する。小さいながらも、原発に頼らない持続可能な農業と地域社会を目指す。厳しい困難を新たな視点で乗り越え、安全な地域を未来の世代に残したい。そんな思いでこ

れからも私たちは南相馬に通う。
(2014年3月 河田)